

館林キリスト教会 デボーションノート（2006年）

7月 1日 今日の通読箇所 創世記 21：15～24

「イシマエルの成長」

離縁され追放されたハガルとイシマエルは、砂漠を放浪する間に水が尽き、井戸は見当たらず、人間の死に方で最も苦しいと言われる「渴き死に」に直面した。砂漠は注意深く進まない、どんな王侯でも軍隊でも隊商でも、渴き死にの危険があるのだ。彼らは落胆、混乱のあまり、その注意も行きとどかなかったのか。しかし神は彼らを見捨てず、井戸を示して救いたもうた。イシマエルはやがて成長し、復讐心に燃えた精悍な野人となった。イシマエルを助けた神は、今のイスラエル、アラブの対立について、長く深い理由があるとしてもなお、闘争でなく平和共存を望んでいたもう。この章にもそれははっきり示されている。

7月 2日 今日の通読箇所 創世記 21：22～34

「契約の井戸」

ベエルシバは、イスラエルの南方、砂漠地帯に接した町で、遊牧民と、農民や、技術者などとの交易市場があり、大事な町だった。いま地域の酋長が自ら提案して、アブラハムと対等の不戦条約、不可侵条約を結んだ。彼らもアブラハムの生涯を見れば、神がともにいたもう事実は明らかだから、おのずから畏敬の念を抱き、さればこそ対等の契約を結んだのだ。さらに契約の方式は、聖書方式、アブラハム方式で行われたようだから、対等以上だった。酋長が、契約の方式の意味について質問したのも面白いし、また、アブラハムが井戸を取られた被害を訴えても、向こうがとぼけているのも面白い。とにかくこの契約は成立した。この井戸は今もベエルシバに残っている。

7月 3日 今日の通読箇所 創世記 22：1～19

「アドナイ・エレ」

イサクが与えられた後の、アブラハム一家の幸福は想像に難くない。アブラハムは成功し、ハガル事件は終結し、家庭に問題はない。いよいよ神様の祝福の時が来た。しかし、いつのまにか、イサクに対するアブラハムの愛が、神様に優先してきたのに気がつかなかった。「イサクを燔祭に捧げなさい」という神様のご命令は、残酷で不合理だ。アブラハムは祈った。そしておそらく、最近の自分の信仰の推移に気がついたのだ。そして翌朝早く出発した。しかし結果的には、神様はアブラハムの信仰の服従を認め、アブラハムを許し、イサクの命を助けて下さったのだ。時に愛する者を奪われて、神への愛のテストを受けるのは、時にわれわれの信仰生活にもあることだ。

7月 4日 今日の通読箇所 創世記23：1～20

「サラの死」

糟糠（そうこう）の妻〔苦勞を共にしてきた妻〕サラも、神の時が来て天に召された。アブラハムの悲しみも思いやられる。あるとき某姉の証を聞いた。彼女は母に勧められて、こどもの時からよく本を読んだ。伝記が多かった。そして、どんなすばらしい人の伝記でも、最後にはその死で終わるのを淋しく思った。ある日書棚を見ながら「キリスト伝」だけは、死によって終わっていないのに気がついた。その時この本は、書棚の中で輝いて見えたと言う。やがて彼女は信仰に導かれ、今は宣教師だ。聖書の人物も最後はその死で終わる。「山々のふもとに村あり、村々の奥に墓あり」。これは結局この世の姿だ。しかしキリストは我々を永遠の天国に導いて下さるのだ。

7月 5日 今日の通読箇所 創世記24：1～21

「嫁さがし」

ここはイサクの嫁さがしの話だ。アブラハムは、母親を失って淋しいイサクを、慰めようと考えたのだろう。しかし周囲の異教徒カナン人から嫁を迎えるのは、神の御心ではない。そこで故郷のアラム、アブラハムの出身地から嫁を迎えようと、しもべ、おそらくエリエゼルを送った。この原則はいまもクリスチャンによって守られねばならない。またイサクが、自分の妻の問題であるにもかかわらず、一切を父に任せているのはどうだろう。勿論時代も場所も違う。しかしある人は言う。「イサクは結局結婚に成功した。彼は『神に任せて待つこと』を知っていた。むやみにきよるきよるしなかった。これは学ぶべきことだ」と。

7月 6日 今日の通読箇所 創世記24：22～33

「少女リベカ」

砂漠の井戸で出会ったリベカに、エリエゼルは水を求めた。しかしそれは一種の人物試験だった。井戸は深い。水汲みに降りて行くのは大変だが、疲れた老人の旅人を見れば、飲み水くらいは誰でも施すだろう。しかし牧畜の仕事に慣れたこの少女は、多くのらくだに水を飲ませるのがいかに大変かをよく知っていた。一頭のらくだが石油缶10本くらい飲むのだ。しかも彼女はみずから申し出て、せっせと水を汲み上げ、乾いた10頭のらくだを満足させた。健康で仕事になれていて、よく気がついて親切で、骨惜しみをしない、りっぱな少女だ。しかも「旅人をねんごろにもてなす」のは、神を信ずる者の原則的人格だったのだ。

7月 7日 今日の通読箇所 創世記24：28～44

「メッセージ」

神様のお導きで、エリエゼルはラバンの家の客となった。さて夕食のご馳走が出るとエリエゼルは、疲れかつ空腹なのに、食べようとはしなかった。彼には責任をもって伝えなければならない、主人アブラハムのメッセージがあるからである。やがてすぐに主人ラバンにそのメッセージを語るのであるが、忠実な、責任感、使命感に満ちた彼の態度には心うたれる。「わたしは福音を宣べ伝えても誇りにはならない。わたしはそうせずにはいられないからである。もし福音を伝えなければ禍である」と言う、パウロのことも思い浮かぶではないか。

7月 8日 今日の通読箇所 創世記24：48～67

「イサクの結婚」

エリエゼルの話と、黄金の鼻輪、腕輪などの贈り物で、彼の主人アブラハムとその嫡子イサクの事は充分に分かった。ラバンは確かにこれが主の導きであると悟ったのでその申込みを受けた。おそらくその夜、ラバン夫婦とリベカの間にも相談が交わされたろう。エリエゼルは翌早朝、リベカの決断を聞くとすぐ彼女を連れて出発した。国ではイサクが、夕方の祈りを終えて散歩している時、この行列が近づいた。リベカは、彼がイサクであると聞いて、らくだを降り、ヴェールに身を覆ってひれ伏した。彼らは結婚した。「母に別れ、寂しさのうちに暮らしたイサクは、いまふたたび慰めを得た」と聖書にしるしてある。本当に敬虔で、美しい、ロマンスではないか。

7月 9日 今日の通読箇所 創世記25：7～18

「アブラハムの死」

信仰の父アブラハムも、充分な天寿を全うした後、神のみこころの時に天に召され、そのなきがらはサラと一緒に墓に葬られた。旧約中、アブラハムは最高最大の人物と言える。彼は「信仰の父」「神の友」と呼ばれた。また、マタイ福音書にもイエスの系図に「アブラハムの子、ダビデの子」としてされている。イサクは彼の嗣子として、その後を継いだ。彼の義理の兄イシマエルもアブラハムの葬儀には出席して、イサクとともにアブラハムを葬ったと書いてある。またこの章には、多くの系図が書いてある。聖書の最初の形は、族長たちの系図、年代記だったろうという考え方もうなずける。かくてこの一家はその二代目、イサクの話に進んで行くのだ。

7月10日 今日の通読箇所 創世記25：19～26

「ふたご」

ここからイサクの家族の話が始まる。「兄弟は他人の始まり」などと言う。彼らのこどもは、一人はイサクに似ておとなしくて素直、しかし反面ずるい人間になるかもしれない。一人はリベカに似て意思も生き方も強い。しかし反面粗野になる恐れもある。彼らは双子であったが、すでに胎内において誕生の順位を争った。妊娠中の不調和感、不快感に困ったりリベカが祈ると、神様は二人の子供の性格や役割について教えてくださった。これはやがて彼ら夫婦の、育児の指針にもなるはずだった。さて誕生の後、イサク夫婦は子供たちにどんな態度を取るだろうか。

7月11日 今日の通読箇所 創世記25：24～34

「偏愛、欺瞞、軽率」

育児について両親は祈り深くなければならない。ましてこの場合、神によって、ふたりの子供の性格、素質、役割などがあらかじめ示されていたのだから、よく心得て子供を育てるはずだった。それなのに、彼らは人間的な愛情が優先し、明確で男性的な性格のリベカは、おとなしく慎重なヤコブを愛し、従順で静かなイサクは、自分と反対の男らしいエサウに魅力を感じた。彼らが大人になって、家督相続が日程に上ってくると、のんきなエサウと違って賢明なヤコブは、慎重に策略を練った。そして軽率なエサウの空腹の機会をねらって、豆のスープと交換で家督権を物にした。エサウは父親の偏愛と自分の腕力で何でもなると思ったかもしれない。それも軽率だ。

7月12日 今日の通読箇所 創世記26：12～25

「生活者イサク」

砂漠生活の遊牧民にとって、主食の穀物生産がないのが弱点だ。イサクはわずかな水の活用で麦の生産に成功した。彼は同時に井戸を見つける天才だったようだ。いつも水に飢えた周囲の乱暴な民族が、難癖をつけてはその井戸を奪おうとする。イサクは強く争わず、結局は井戸を奪われることが多かったようだ。しかし彼は祈ってまた井戸を見つける。そして次第に繁栄する。神の祝福は誰の目にも明らかだった。神はイサクに現れて彼の生活を認め、新しく祝福の約束を与えて下さったのだ。25節に彼の生活の優先順序が暗示されている。まず礼拝。次にテント、すなわち家庭。次に井戸、つまり生活の方法だ。多くの人はこの順序を逆にしている。そこが問題なのだ。

7月13日 今日の通読箇所 創世記26：23～34

「契約の井戸」

イサク一家は有力種族だが、遊牧民だから土地を持たず、家畜を連れ牧草を求めて移動する。しかし土地の人と関係しないわけにもいかない。この地の有力者アビメレクたちは、これまで部外者イサク一家の寄留滞在を好まず、あるいはいじめ、時には妬み、出て行けよがしの態度だった。しかし一家には神様がついていて、祝福を受けていることが次第に明白になってきた。アビメレクはだんだん一家を尊敬し、また恐れるようになった。そこで彼らの方から話を持ち出して、イサク一家の滞在の自由と、相互協力、相互不可侵の契約を結ぶにいたったのである。つまりイサクの証と感化が異邦人を動かし、その結果、平和な居住ができるようになったのだ。すばらしい話だ。

7月14日 今日の通読箇所 創世記27：1～20

「詐欺」

狡猾なヤコブは、赤いレンズ豆のスープで、軽率なエサウを欺いて家督の権を奪った。今度はその家督権を公式に自分のものにするため、母のリベカと共謀して父と神を欺こうとするのだ。ほとんど信じられない話だ。もともとこの犯罪の基礎には両親の偏愛があったのだが、悪魔は人の強く欲しがるものにつけこむ。その賢明さにも、軽率さにもつけこむ。やがて仲間を造らせチャンスをも活かす。またひとつの罪を成功させると、すぐ次の罪に誘う。つまり罪はエスカレートするのだ。モーセの殺人も、ダビデ王の姦通も、彼らが悪魔の手陥った結果、悪魔の筋書き通りに行われたのだ。われわれも警戒しなければならない。

7月15日 今日の通読箇所 創世記27：21～30

「欺瞞のおぞましさ」

この兄弟が生まれる前に神様は、「兄は弟に仕えるだろう」と、兄弟についての神様の選び予定を教えてくださいました。人は生まれながら素質が違い、役わりもそれぞれだ。先頭に立ち中心に座る役目も、それを助ける女房役もあり、同じく必要で貴重だ。もし両親が神のみ心にそって、彼らがそれぞれの役割を果たしつつ神に仕えるように彼らを育てたら、イサク一家は安泰で余計ないざごともなく、アブラハム、イサクのように神に用いられたらうに、残念な結果になった。それにしても欺瞞の中に神の名を悪用し、エサウを溺愛する父親の盲目に乗じ、しかもその父親の祝福にアーメンと唱和するヤコブの姿は、みっともなく恥ずかしい。狡猾だが決して賢明ではないのだ。

7月16日 今日の通読箇所 創世記27:30~38

「俗 悪」

「一杯の食のために長子の権を売ったエサウのように、不品行で俗悪な者にならないようにしなさい。彼はその後祝福を受け継ごうと願ったけれども捨てられてしまい、涙を流してそれを求めたが、悔い改めの機会を得なかった」と「ヘブル人への手紙」にある。彼は前に言った。「わたしは死にそうだ。長子の特権など私に何になるだろうか」と。これは誇張だった。目の前にあるのは一杯のレンズ豆のスープだったのだ。彼は思ったろう。「父親は私を偏愛している。わたしはヤコブより腕力が強い。いざとなれば何とでもなる」と。しかしだめだった。われわれも目先の現世の利益や快樂のために、救い、永遠の生命、天国の祝福を粗末にし、また神の恵みに甘えて失敗した、エサウのような者になりたくない。

7月17日 今日の通読箇所 創世記27:39~46

「家 出」

エサウはもう打つ手がないのを知って、ただただ狡猾なヤコブを憎んだ。そして「決してヤコブの悪計を成功させない、財産は彼に渡さない。父親が死んだらヤコブを殺す」という不気味な決意をした。母親もヤコブもこれを察知した。策は多いが腕力のないヤコブは、家出するより仕方がなかった。つまり悪知恵の果ては「虻蜂（あぶはち）取らず」になったのだ。もう一つ。ヤコブはまだ未婚だったらしい。しかしエサウはすでにヘテ人の娘二人と結婚して、この異邦人の嫁は両親の悩みの種になっていた。(26:34.35) エサウはみずから、信仰の家族の後継者にふさわしくない素質を示していたのだ。ヤコブの旅行目的の一つは、父イサクの時のように、信仰のある親族から嫁を探すためだった。またこれが外部の人に対する表向きの説明にもなったろう。かくてヤコブは家出した。

7月18日 今日の通読箇所 創世記28:10~22

「石の枕」

これほどの大家の息子の旅行だから、たったひとりということはないだろうが、少数の従者で、人目を避けて出発したのも事実だ。いまや彼は孤独だった。目立たぬよう、その夜は砂漠にテントも張らず、石を枕に寝た時の彼の心境はよく分かる。孤独、寂しさ、後悔、喪失感で、真っ暗な気持ちだったろう。万事は自業自得なのだ。しかしそれと共に、彼は種々の事を神に示されて、今こそ謙遜に悔い改めたと思う。実は彼は決して孤独ではなかった。その夜、神は天からヤコブの枕もとまで美しい階段を降ろし、「高く聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、砕けたる者の心をいかす」(イザヤ、57:15) 神が、彼の悔い改めを受け入れ、いつまでも祝福をもって共にいてくださることを、お示しになったのだ。何という神の憐れみだろう。

7月19日 今日の通読箇所 創世記29：1～14

「ラバンの娘ラケル」

2.3週間の旅行の後、ヤコブは志す地方に来た。しかし常に移動するテントを捜すより、数少ない井戸を捜すほうが早い。はたして井戸で待っているところに、ラバンの娘ラケルが、羊に水を飲ませるためにやってきた。遊牧民の娘は、少女でも二百頭ぐらいの羊の責任を持つ。その一頭一頭を覚えている。頭の中で名前をつけてあるのだ。わたしはイスラエル旅行のバスの中から、井戸で羊に水を飲ませる場面を見た。呼ばれてきた奥さんが、何回でも水を汲み上げる。疲れるともう一人の奥さんが交代し、さっきの奥さんはしゃがんでいる。旦那は何もしない。バスの中の日本人の奥さん方は怒っているのに、彼は白い歯を見せ、いいごきげんで手を振っている。

7月20日 今日の通読箇所 創世記29：15～31

「ごまかし婚資」

日本の「結納」と同じで、ここでも結婚の為に「婚資」が求められた。ヤコブはそれがなかったので、ラケルとの結婚の婚資として7年間働かされた。しかし美しいラケルのためには、これを数日のように感じたと言うのもかわいい。ところが結婚式が済んでみると、与えられたのが姉のレアであったのに驚いた。信じられないようだが、姉妹だから姿も似ていて、式にはベールで顔を覆い、寝室は暗いからこんなこともあったのだろう。またレアもヤコブとの結婚は望むところだった。結局「姉から先にというのが所の習慣だ」と言い張られた。しかしヤコブはなおラケルを愛した。そこでラケルのために、さらに7年間ただ働きをさせられた。実はラバンはヤコブに輪を掛けた狡猾なのだ。これから先が見ものだ。

7月21日 今日の通読箇所 創世記29：31～30：8

「ヤコブの家族」

たとい器量が良くなくても、またラケルの美貌にひかれるヤコブの態度がどうでも、レアは立派な女性だったとみえる。とにかく彼女は主婦の地位を守った。そして神様も彼女を祝福して、次々と子供をお与えになった。遊牧民にとって家族の多いほどの強みはない。またそれが祝福のしるしと思われた。教会も同じ、クリスチャンもまた同じだ。多くの人を信仰に導くことができれば最高の幸せだ。詩篇にも「壮年の時の子供は勇士の手にある矢のようだ。矢の満ちた矢筒を持つ人はさいわいである。彼は門で敵と物言うとき恥じることはない」とあるとおりだ。これに反して、実を結ばないことはさびしい。多くの子を産む教会。多くの子を産むクリスチャン。われわれもそのために祈って行こう。

7月22日 今日の通読箇所 創世記30：25～36

「上長者の甘え」

ヤコブはラバンの家族として長い間働いたが、結婚前の延長のようで、決まった報酬もなく、いまだに一家を成さずにいるのをもどかしく思った。また長く離れたままの故郷も恋しい。そこでこのようなことを申し出たのだ。いったい家族などが事業にあたると、逆に問題が起こりやすい。家族の心易さから、つい仕事量や利益の配分がルーズになるからだ。クリスチャンの事業所でも同じ問題が起こる。雇用者は、クリスチャン勤労者の献身的な忠実を期待して喜ぶが、雇用者のほうのクリスチャンらしさが、勤労者の仕事量の配慮や、報酬にあらわれないことがあるからだ。これは上長者の甘えだ。何事にも注意が必要だ。ラバンの場合もそうだった。ここでいまさら「では報酬の相談をしよう」と言う。

7月23日 今日の通読箇所 創世記31：1～9

「独立の機会」

遊牧民の主な財産は羊だが、ヤコブはまだ「これが自分の羊だ」というものを持たず、ほとんど無財産だったらしい。白い羊の群れの中で「ぶち」や「まだら」の羊は少ない。それだけを貰おうと言うのは、数は少ないし区別はしやすいから、ラバンも賛成した。しかししばらくたつと、ぶち、まだらで、しかも強壮優秀な羊が多くなり、みるみるヤコブの財産は増えた。このためにヤコブが使った方法は、我々にはよく分からない。また確かに神の祝福があったようだ。ラバンとその家族は、このありさまを見てヤコブを憎んだ。いよいよ神の時がきたと判断したヤコブは、ラバンを離れて帰郷しようとする。「わたしは力いっぱいラバンに奉仕したが、ラバンはずるくて駆け引きが多く、十回も約束を替えた」というヤコブの言葉も、いかにも哀れに聞こえる。

7月24日 今日の通読箇所 創世記31：11～21

「ベテルの神」

ヤコブはラバンの家族として生活するのに行きづまった。そこに神のみ使いがあらわれて、ヤコブに帰国のときが来たことを告げた。ヤコブが後悔と失意のうちに故郷を棄てたのは20年前だ。そのときはヤコブの狡猾がわざわざいたのだった。その後の20年間、ヤコブは、今度はラバンの狡猾の被害者として暮らした。20年前、あの寂寥と孤独のうちに砂漠に寝た夜、ベテルで神はヤコブの悔い改めを受け入れ、生涯ヤコブと共にいてくださる約束をお与えになった。そのとおり、困難なこの期間、神はヤコブと共にいて、支えてくださった。そしていま彼の帰郷を導いてくださるのだ。妻たちもラバンの狡猾には嫌気がさしていたので、一緒に行くと言っている。

7月25日 今日の通読箇所 創世記31：17～32

「なつかしい故郷へ」

いよいよヤコブは妻子を連れ、全財産をたずさえて帰郷することになった。ラバンは帰郷をみとめないに違いないから、その留守をねらって、まるで脱走のように出発した。ラケルは腹いせのつもりか、ラバンのテラピムを盗み出した。テラピムは昔のお守りのようなもので、多分金か宝石でできた、愛玩物でもあったろう。これを知ったラバンは手兵を連れて追跡する。彼にとって家族は全部自分の労働力。家族の財産は全部自分のものでしかない。家族の脱出は、逃亡、持ち逃げに等しく思われるのだ。場合によってはヤコブたちは、いやおうなしに、腕づくで連れ戻されるところだったが、神様のご干渉でようやく事なきを得た。さすがのラバンも猫なで声で別れを告げる。

7月26日 今日の通読箇所 創世記31：33～42

「苦労の回顧」

ヤコブは最初、ラケルの容色に魅せられて結婚を希望し、レアの方は仕方なしにもらわされたようなものだったが、信仰的、人格的には、ラケルが優れていたというわけではなかったらしい。物を盗んで巧妙にそれを隠すなどは感心できない。さてここに、ラバンに対して長々と語られたヤコブの言葉は、苦情以上のもので、冷酷で強欲で狡猾な家長、上司の姿を浮き彫りにする。(ヤコブの手紙、5：1～6)にも書いてあるとおりだ。立場が有利で強いものは、よほど注意しないと、知らず知らずに弱いものいじめをしてしまうことが多い。ボクサーが喧嘩して相手を殴ると、特別重い罪を課せられる。神様の裁きも同じだろう。お互いに深く注意をしなければならない。

7月27日 今日の通読箇所 創世記31：43～55

「仲なおり」

ラバンは強欲で、家族さえ労働力としか見ない人物だった。だから出立した家族のヤコブやその妻子(つまり自分の娘や孫)を、武力で捕らえようと追ってきたのだ。しかしここに彼らの和解が成立した。その事情としては、第一に神様がラバンに反省と自重を命じられたこと。また彼の心に肉親に対する愛が目覚め、将来とも彼らと家族の交わりを望んだこと。さらにヤコブの長いしみじみとした話で、改めて彼らの深刻な苦労を知り、あわれみの心が生じたこと。などが考えられる。彼らが誓約し、記念碑を建てて和解したのはすばらしい。争いは神のみこころではないし、また人間の幸福でもない。愛と和解と一致、これを神はもっとも喜びたもう。人間もまた同じだ。

7月28日 今日の通読箇所 創世記32：1～12

「兄エサウ」

ヤコブ一家は、ラバンとの和解がやっと済んで国境を越え、なつかしいイスラエルの地に入った。しかし「一難去ってまた一難」。故郷は同時に、ヤコブに対して古い怨念を抱く兄エサウの領地である。ヤコブは兄との対面を恐れなければならなかった。「まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを、刈り取ることになる」。という聖書のお言葉のように、ヤコブは昔自分のしたことの報復を恐れるのだ。しかし神はマハナイムにおいて、エサウより先にヤコブを迎え、その保護を明らかにしてくださった。エサウが武装兵400人をつれてヤコブに会いにくるという、部下の報告を聞いたヤコブは、財産の半分は助かるように、家畜を二つの群に分け、また同時に、出国の時に与えられた神の約束の言葉にすがって、必死にその保護を祈るのだった。

7月29日 今日の通読箇所 創世記32：13～22

「おみやげの行列」

最近ヨルダン、イスラエルを旅行した伊藤先生の話では、この夜ヤコブが逗留したヤボクの渡しはかなりの峡谷だそうだ。ヤコブは兄エサウの怒りをなだめるために、たくさんの贈り物を選び出し、それを一部分ずつ部下たちに預けた。そして間を置いて順々に、一群ずつ贈り物をエサウに披露するように、またそのたびに丁寧なヤコブの挨拶を取り次ぐように命令した。つまりなし崩しにエサウの気持ちをなだめようというわけだ。前には財産の半分の安全を考えて群を二つに分けたり、祈りつつも工夫の限りを尽くすヤコブは、あまりりっぱではない。見え透いた小細工を笑う人もいる。しかし「祈りつつも人事の最善を尽くす」ということは、笑うべきではなく、むしろ学ぶべきことと思うがどんなものだろう。

7月30日、31日 今日の通読箇所 創世記32章、33章

「故郷に帰る」

ヤコブはようやくラバンと話がついてパダンアラムから出発することができたが、一難去ってまた一難、故郷に入るためには、兄エサウに対面、和睦をしなければならぬ。これはラバンに対する以上の難事であった。挨拶の使者をつかわしてみるとエサウは400人の兵士を連れて進んでくるといふ。怯えたヤコブは万一のエサウの襲撃の場合も、半分は逃げられるように、全財産を二組に分ける。エサウのためには莫大な贈物を用意する。しかも、なし崩しにエサウの怒りをやわらげるように、それぞれ使者をつけた群れと群れの間を隔て

て、挨拶と贈物を順々に、小出しにエサウの前に提出する。いずれもヤコブらしい小細工だが、本人もこれでエサウとの和睦が簡単に済むとは思えない。とても持ち前の浅知恵では切り抜けられぬ場面で、確信もなく恐怖に震えていた。

彼はその夜、有名なペニエルの祈りをするが、祈りのうちに神の使いと一晩中相撲を取ったというこのめずらしい経験は、霊的でありなから、かつ身体的な体験でもあったようだ。彼は長年人を押しのけて生活してきた。信仰といい、祈りというも、従順に神のみ心を求め、喜んで服従するということは苦手で、結局神のみ心より、自分の方針通りの祝福を得ようという態度で、神に対してさえ、その名のごとく押しのける者だったのである。ヤコブはこの夜長い祈りの間、神に対して例のように我意を通そうと頑張った。しかし神の執拗かつねんごろなお取り扱いを受けて、一切の問題の根源が、自分の「押しのける自我」にあったことを悟った。彼はいまここで悟り、砕かれ、悔い改めた。腰のつがいが外れて腰抜けになった。ヤコブはこの祈りで、神と争ったのか自我と争ったのか。ヤコブとの争いに神が勝ったのか、自我との争いにヤコブが勝ったのか。いずれにせよ、これはペニエル（神と顔を会わせる）の深い経験だった。そしてヤコブの神との関係も、ヤコブの性質も変った。神はそこで「もうヤコブと名乗るのは止めて、イスラエル（神のプリンス）と呼びなさいとお命じになったのであった。

案ずるより産むが易く、エサウとヤコブの対面はスムーズに済み二人は和睦した。血は水より濃いという。ことにエサウは単純な性格だから、ヤコブ懐しさがあらゆる気持ちに先立ったろう。また昨夜特別な霊的祝福を経験したヤコブの、柔和にして恐れぬ態度も良かった。しかし、その一切は神の恵みだったのである。それでも気まぐれなエサウを警戒してか、その言葉を辞退して、別に分れて住むことにした。依然ヤコブ的注意深さもまた面白い。（とても長いショートでした）

